九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

鳥栖市誌 : 中世・近世編

服部, 英雄
九州大学大学院比較社会文化研究院 : 教授 : 日本史

https://hdl.handle.net/2324/17856

出版情報：鳥栖市誌. 3, 2008-03-31. 鳥栖市教育委員会
バージョン：
権利関係：

第2章　南北朝の争乱と幕府統治

雲上峠遠景（東南から）

建武3年（1336）、京都の合戦に敗れた足利尊氏は九州に下って再起に成功する。少弐貞経（妙恵）は大宰府有智山城にて、自身・一族多数が討ち死にするという大きな犠牲をはらう。劣勢が予測できたにもかかわらず、貞経は、嫡男頼尚ら一族精鋭を事前に尊氏のもとに派遣していた。鎌倉初期から鎮西奉行人として九州北部を支配してきた少弐氏であったが、蒙古襲来を契機とする北条氏による九州直接把握、すなわち鎮西探題の権限強化には反発することが多かった。北条氏を打倒した足利尊氏を、少弐氏が熱烈歓迎した背景である。

しかし鎌倉幕府の方式を踏襲した尊氏は、足利一門の一色道猷を九州探題として派遣してきた。取れたはずの目の上のこぶが、またできる。少弐氏と尊氏の間には溝が生まれる。京都にて足利尊氏が弟の直義と対立し、全国を巻き込む内戦（観応の擾乱（じょうらん））になると、直義方の直冬（尊氏の実子だったが敵対）が九州に下る。少弐氏は直冬を歓迎した。一色氏による宮方（南朝・菊池氏）攻略が成功しなかった後、次なる探題として派遣されたのが今川了俊だった。了俊はついに少弐冬資を誅殺する。少弐氏にはさらにその後の探題渋川氏も宿敵だから、大友氏と結んだ。

武家方（幕府方）、宮方・少弐方、入り乱れての攻防は鳥栖市域でも展開される。西海道を西に進軍する場合、一つ一つ拠点を確保しながら、前進した。逆もまたしかり。城山（基山）、宮浦、由比（柚比・東井樋山）、高上（神辺）、雲上（平田）、所熊（野老隈・村田）には、しばしば陣城が築かれ攻防があった。すなわち応安6年（1373）、今川了俊の東肥前進出には宮浦、由比、高上、雲上、所隈に陣を取った。こうした山陵はくりかえし陣となる。のち文明10年（1478）、長享2年（1488）にも日隈（朝日山）、城山、神辺・東井樋山が登場、西海道通行確保の鍵だったことがわかる。

第1節　南北朝期の動向と幕府統治

1　足利尊氏と九州武士団―多々良浜合戦・逆転勝利の真相

多々良浜（箱崎）合戦

建武3年（1336）正月、京都での戦いに不利となった足利尊氏は、2月末、九州に下向した。3月2日に多々良浜の合戦で菊池氏に勝利、大宰府・箱崎の枢要地を掌握した。わずか一月後、博多を出発し、5月末には楠木正成を敗死させ、6月3日には入京をはたした。日本史における奇跡の逆転勝利のうち、最大のものであろう。

現在の鳥栖市域を拠点としていた武士のうち、曾禰崎道西は建武3年2月28日に少弐頼尚に属して、前哨戦である筑前有智山城防衛を戦った。この合戦で、道西のごく近くには武蔵国西小河季久や、大友一族の肥後国詫間貞政がいて、道西が西小河季久の負傷を目撃し証言した[1]。2月28日有智山に引き籠もり、29日には「御社谷」にて合戦とある。季久は若党と郎従の2人が討死、べつの若党1人が膝を射られ、自身も左の股を矢で射られるという大けがをした。翌日には大将少弐貞経（妙恵）自身が討死するという激戦で、悲惨な敗戦であった。

少弐貞経の甥たち、つまり兄貞資の子である資道、盛尚、貞元、資清、愛御丸、盛秋、および同じく兄である高経の子経高がここで戦死し、貞平、祥応（禅僧、宗応）、顕村、頼定、景村といった人物の戦死も伝えられている（「武藤系図」）。明白な敗戦で、少弐武藤氏は全滅に近かった。ふつうならば再起不能であろう。ほか詫磨貞政の若党の死も伝えられている[2]。

図2-1　多々良浜の位置（約１/55万・国土地理院）

1　「小川文書」『南北朝遺文』九州編５５３

2　以下、史料の多くは『大日本史料』6編3に所収

ところが大勢が逆転する。翌々日、３月２日の多々良浜の合戦では尊氏が完全勝利した。なぜ尊氏は多々良浜で劣勢を挽回できたのか。

多々良浜の合戦については『太平記』『梅松論』の記述がよく知られている。

両者の叙述には似通った部分もあるが、佐賀県出身である明治期の歴史学者・久米邦武の言によれば、前者の『太平記』は「史学に益なし」とされている（明治24年・１８９１）。「太平記読み」の存在が知られているように、『太平記』は「語り物」であった。語り手側は聴衆の反応が良ければ高い対価（報酬）を得られた。報酬は聴衆の盛り上がり方に比例した。

受けねらいの文学であるから、聴衆におもねる。足利尊氏は敵方であり悪人であった。その筋書きに徹しなければ、聴衆は感動せず語り手の収入は減る。『平家物語』とおなじであって、歴史書ではなく、虚構も許される文学である。『太平記』に対し、徹底した史料批判が要求される所以である。

『太平記』によると、建武３年正月27日から30日にかけての京都合戦で、新田義貞軍（官軍）は２万余騎、足利尊氏軍は80万騎だったと記されていて、40倍の兵力差があった。この劣勢を義貞は逆転させて勝利を収めたという。馬一騎にはふつう従者各２人が付く。80万騎とあれば、騎馬武者が80万人いて従者が１６０万人だから、尊氏軍は２４０万人いたことになる。平成18年（２００６）鳥栖市の人口が６万４千人、福岡市の人口でさえ老若男女あわせて１４０万人で、青年・壮年男子は30万人程度か。南北朝時代の日本の人口はいまの人口の10分の１で１０００万人ほどと推測され、男は５００万人である。その半分が参加した戦いなどあり得ない。誇張がすぎよう。80万騎を誤記ないし錯誤とみると、あとの数字（20万騎）にも、つながっていかない。作り話である。

『太平記』の記述を追ってみると、西宮・湊川の合戦に敗れた尊氏軍は、大友氏の用意した船に乗るが、乗ろうとするものは20万騎（60万人）、船はわずかに３００艘であったため、一艘に２０００人が乗らねばならず、沈んだり、同士討ちがあって、多くが見捨てられたという。兵庫を落ちたときは７０００騎（２万１０００人）であったが、中国筋に重

臣を配備していったから、次第に数が減り、高・上杉・仁木・畠山・吉良・石堂（石塔）ら一族近臣ばかりとなって、多々良浜湊に着いたときには、馬も鎧もない５００人以下になっていたという。このようなストーリーがはたして史実として信じられるだろうか。

多々良浜では味方はわずかに３００騎、敵方である菊池勢は４・５万騎だったため、絶望した尊氏は腹を切ろうとしたが、弟直義に説得され、思いとどまったとも記されている。いかにも真に迫っているが、実はこうした記述はここで初めて登場するわけではない。京都より丹波路を落ちようとした尊氏は、３度にわたって自害しようとしたとされている。類似エピソードのくり返しである。

『太平記』の作者は、まさに南朝に敵対した総大将が、ほとんど絶体絶命になるまでに追いつめられていたことを、ストーリーとして強調しておく必要があった。あとほんのわずかなところで敵をとり逃がしてしまった。そういうドラマなのである。

さて多々良浜合戦時の数字は『太平記』のみにみえるものではなく、じつは『梅松論』にも共通する。『梅松論』は作者こそ未詳ながら、政治的立場は『太平記』とは異にし、北朝方の主張を反映する。その『梅松論』は尊氏方については京都より供奉のもの３００余騎、少弐方５００余騎としている。よってほぼ信頼できる数字かと思われる。ところが菊池方（宮方）については６万余騎としていて、数は『太平記』よりも倍近く多い。こうした一連の数字はどう理解していったらいいのだろうか。

『梅松論』には軍勢の数の記載があまりないが、ときおり数千騎という表現がある。『太平記』がいうような万騎単位の兵力動員はもともとなく、最大でも数千騎程度の兵員だったと見たい。ちなみに関ヶ原合戦の兵力動員は西軍８万人、東軍７万５千人とされている。南北朝の動乱ではここまでに大がかりな総動員決戦はなかった。

また尊氏の鎮西下向につれて次第に兵員数が減っていったわけでもなく、鞆や尾道、赤間関では逆に味方になる武士が馳せ参じて、数が次第に増加している。具体的に備後尾道（尾路）においては宗像大宮司が派遣したと推定される筑前国御家人朝町光世が着到[3]を

3　当時、到着のことを着到といった。

告げているし、さらに長門国赤間関では龍造寺実善、安芸貞元、島津忠能といった鎮西の人々、また阿波国御家人飯尾吉連らが参着していることが古文書によって確認できる[4]。古文書を残さなかったものが大多数であることを考慮すれば、このようにして尊氏の陣営に加わっていた武士は相当に多かったのであろう。京軍の追撃に備えて播磨に赤松、備前に石橋、松田、備中には今川、ほか安芸・周防・長門に武将を配備したとする。これも正常な感覚での軍事配備である。

室津でも鞆でも尾道でも赤間でも、尊氏軍は攻撃や抵抗を受けることはなかった。尊氏・直義は海路を行ったであろうが、船は潮待ち風待ちが必要だから、徒歩や馬の方が確実で早かった。兵は海陸を併行するのである。遠賀川河口の葦屋津、さらに宗像へと進むに連れて、軍勢は増加していく。次第に減っていったと強調する『太平記』が画く世界と、史実は逆であった。

いっぽう九州における宮方の対応も迅速であった。尊氏の下向を前に、菊池氏や三原氏・秋月氏らが大宰府・少弐氏を攻撃し、２月27日には筑後の大田・清水にて合戦が行われている。かれらは平安期に刀伊入寇に功績のあった藤原蔵規（まさのり）また大蔵種材の末裔で、大宰府官人である。鎌倉幕府の鎮西統治機構として関東より下向し、君臨した少弐氏とはもともと敵対する要素が多かった。少弐貞経は尊氏を迎えるため、子の頼尚に５００騎の軍勢を付けて派遣した。菊池の攻撃に備える大宰府の防備は手薄にならざるを得なかったが、たとえ自身の兵力は削減してでも尊氏に派遣する。それが少弐氏の選択であり、尊氏への思いであった。

27日の筑後合戦（大田・清水）を経て、大宰府攻防、つづいて宝満山に後退しての有智山城籠城戦となった。有智山城は山岳修験の山、宝満山の一角にあって、有智山寺（内山寺）を城砦化したものと考えられる。山上にあって、生活に必要な建物や水が豊富であった。

最初に見たごとく少弐一党は壊滅状態になった。しかし籠城していた曾禰崎道西は建武３年（１３３６）12月29日に筑後豊嶋右衛門三郎「跡[5]」を与えられている。曾禰崎道西

図2-2　宝満山遠景

4　「宗像文書」ほか『大日本史料』6編3、92～94頁

5　「跡」とは前任者や敵対者がいなくなった跡地である。場合により、依然敵が勢力を維持していれば、排除した上で自分の所領とする。

や武蔵国西小河季久、肥後国詫間貞政らは確実に生き残って恩賞を受けているのだから[6]、完全に落城したわけではなかった。菊池・三原軍は、後方を有智山残留部隊に脅かされつつ、敵陣に突入するという陣形を取らざるを得なかった。弓矢を大量に消耗した上に、はさみ討ちのリスク・危機を背負って、博多・箱崎に進軍したのである。眼前には尊氏のもとに派遣されていた無傷の少弐本隊精鋭５００騎（１５００人）がせまっていた。

多々良浜合戦は箱崎合戦ともいわれる。圧倒的な多数を前にした苦しい戦いではあった。しかし『太平記』は少弐頼尚の発言として「敵は大勢にて候えども、みな御方へ参るべき者どもなり、菊池ばかりは三百騎には過ぐべからず」と述べている。敵は多勢だが、核をなす菊池方は３００騎以下であり、内心では足利方につくつもりの者も多数いる、という。３００騎であれば尊氏軍に同じであり、少弐方を加えれば武家方（北朝方）の方が宮方（南朝方）より優位であったのかもしれない。合戦の火蓋が切られると、実際にその通りになった。松浦党・青方氏や神田氏が裏切って尊氏方に付いたのである。このことは『太平記』のほかにも『松浦家世伝』『阿蘇家譜』といった各家の記録にもみえており、事実であろう。

多々良浜において、尊氏方の朝町光世は「分取」（敵の首を取る）という手柄をたてはしたものの、弟光種は討死にした。島津方でも大隅忠充の部下や鎌田清正、豊前では長野義広、また関東からの武士では結城朝祐らが討死にした[7]。

確かに苦戦した。しかし菊池勢からの裏切り行為が続出する中、おそらく後方の有智山城残存部隊からの攻撃も功を奏して、次第に尊氏は優勢になる。酉刻（夕方６時）には勝利し、深夜近くの亥刻（午後10時）に直義が大宰府に到着している。菊池氏は肥後に敗走し、阿蘇惟直は肥前小城郡天山にて自殺、秋月備前守は大宰府まで落ちたところで討たれた。惟直は阿蘇山修験の司祭だから、天山修験の縁故者を頼って逃げたのであろう。秋月が大宰府で討たれたように、阿蘇惟直が大宰府を迂回して肥前に逃れたように、大宰府は早くから少弐方が挽回し掌握していた。

6　「曾禰崎文書」『南北朝遺文・九州編』、前掲・小川文書

7　『大日本史料』6編の3・139～168頁

謎に満ちていた多々良浜合戦の真相は、以上のようなものであろう。曾禰崎氏を初めとする鎌倉幕府恩顧の武士たちは、少弐氏に従って行動した。いったん菊池方に従った者も離反した。源家の嫡流・足利尊氏と、地方豪族であってワンノブゼムにすぎなかった菊池武敏とでは、カリスマ性・統率力に差がありすぎた。足利尊氏が敗残兵の首領に過ぎず、つねに自害と隣り合わせで行動していたとした『太平記』の筋書きには疑問が多すぎる。尊氏・直義兄弟はたしかなる成算のもとに行動し、少弐氏・大友氏ら九州武士団はそれに応えたのである。曾禰崎道西にとっては、死線をさまよった末の薄氷の勝利となったけれど、以後の立場は著しくかれに有利に展開していった。

多々良浜勝利のわずか一月後、尊氏は体勢を立て直して京に向かう。このとき九州北部の尊氏方は、いくつかに部隊を分けて行動した。大きくいって1つのグループA（少弐・大友）は尊氏とともに上洛に同行する。もう1つのグループBは、九州に残って豊後の宮方拠点であった玖珠城攻めに参加し、もう1つのグループCは肥後の菊池氏や同調した筑後の三原氏の攻撃に向かった。この時期の軍忠状・着到状の証判から、Bの大将は一色頼行で、Cの大将は仁木義長・上野頼兼であったと考えられる。

同建武3年（1336）の末、12月29日に曾禰崎道西は筑後豊嶋右衛門三郎「跡」を「沙弥」なる人物から与えられている[8]。曾禰崎氏は豊後国田染（たしぶ）庄をも拠点としていたから、豊後玖珠城攻撃に参加したように考えられる。玖珠城はこの年の10月に落城した[9]。「跡」については既述（39頁）したが、ある人物が支配していた土地について、敵方となって失脚したため、その跡地を与えるというものである。実際にはまだ敵方が実効支配している場合もあって、そうしたときはみずから敵方を排除しなければならなかった。

九州で劣勢を立て直した足利尊氏は、深く神仏に感謝したようである。観応2年（1351）に筆写された安楽寺所領の書上[10]に「将軍家御寄進所」として、「曾禰崎庄地頭職」が見える（既述12～14頁）。ほかにこの史料には天満宮領として市域内の鳥栖庄、幸津庄、同新庄、神辺庄、曽根崎庄内談議田、牛原御領、半免行武名、瓜生野、倉上庄、義得、

8　「曾禰崎文書」『南北朝遺文・九州編』820、沙弥はおそらく一色道猷であろう。

9　「都甲文書」『南北朝遺文・九州編』797、野中文書『南北朝遺文・九州編』795、野上文書『南北朝遺文・九州編』810

10　「太宰府天満宮文書」『南北朝遺文・九州編』3340

藤木村、基肄南郷蓮原里など多数が見えている。このうちの倉上庄は「貞治弐年（１３６３）卯月十日」の島津道鑑譲状ほか[11]に大隅国守護職付守護領としても見えるので、安楽寺領であったのは一部の得分権（年貢徴収権）かもしれない。

養父郡における貞和－直冬と観応擾乱

貞和４年（１３４８）の正月２日には薩摩にいた懐良親王が肥後宇土津に上陸している。親王は北上し、そのことが宮方（南朝方）を活気づけた。養父郡においても宮方勢力と思われる牛原□[12]が蜂起した。しかし一色直氏の支配下にあった武家方（北朝方）の龍造寺季利、今村豊島高弘らは一気に博多まで押し寄せている[13]。その年の10月以前には倉上（蔵上）に武家方の陣が置かれた[14]。貞和５年には養父東郷藤木村（号行武名）内得渕の田畠在家園が綾部浄智に安堵されている[15]。

宮方（南朝）は曽根崎地頭職を恵良筑後権守（宇治惟澄）に与えているが、実効性（実行力）は不詳である[16]。

図2-3　藤木長福寺（足利尊氏の伝説をもつ）

このころ武家方（北朝）・宮方（南朝）の対立に加えて、足利尊氏と弟の直義が対立した。この対立を「観応の擾乱」とよぶ。九州では直義派の足利直冬が反尊氏勢力の頭目として徹底的に戦った。じつは直冬は尊氏の実子であったのだが、なぜか父に疎んぜられ、叔父である直義の猶子となっていた。かれは尊氏政権の用いた観応という年号の使用を拒否し、貞和７年まで、それまでの貞和年号を継続して使用した[17]。

直冬は貞和５年の９月には河尻幸俊の助けを得て肥後河尻に上陸、11月には少弐頼尚の支援

11　「島津家文書」『南北朝遺文・九州編』４４６６、４４６７

12　文書の破損のため実名は不明

13　「龍造寺文書」「南文書」『南北朝遺文・九州編』２４２８、２４２９、２４３１

14　「近藤文書」『遺文』２５９７

15　「綾部文書」『南北朝遺文・九州編』２５９８。トクフチ、トクブチといった地名は、いまのところ検出できない。

16　「阿蘇文書」『南北朝遺文・九州編』２６３５、２６５２、３８８０

17　それ以後は観応２年を使用する。

を得て太宰府に入った。貞和６年になると、直冬はさかんに宛行状（所領給付状）を発給している。この宛行状はどこまで実効性を持っていたのだろうか。あるいは空手形にすぎなかったのではないか。直冬は敵対する尊氏方（一色道猷方）の武士の所領を、「跡」という形で与えることが多かった。直冬は観応３年（１３５２）に九州を去る。所領獲得の実効性は、結局薄かった。

鳥栖市域に関していえば、直冬が与えた所領は以下のようになる。

・貞和６年３月３日・養父郡内15町が「一色道猷入道家人・小久曽四郎三郎跡」として深堀政綱に[18]、

・貞和６年９月20日に養父郡内村田庄地頭職が後藤光明に[19]、

・観応２年12月には養父郡牛原村半分の替わりとして筑前三奈木ほかが、松浦西原鬼熊丸に[20]、

・観応３年６月29日には村田庄地頭職が伊東祐武に[21]、

それぞれ宛行（あてがわ）れた。村田庄などは異なる２人の人物に恩賞地として与えられている。

いっぽう敵対した一色道猷もさかんに所領宛行や社寺への寄進を行った。

鳥栖市域に関していえば、観応元年６月５日「養父郡鳥屋村内田地八丁岩光七郎入道跡」が、また「山浦内田地五丁」が承天寺への寄進地をのぞいて、ともに天満宮安楽寺和歌所に、一色道猷によって寄進されている[22]。

今川了俊の登場と荘園支配の推移

足利直冬が中国（長門）に去った後、九州北部を席巻したのは懐良親王と菊池氏であった。こうした事態に、足利幕府は今川了俊を派遣して、武家方のてこ入れを図った。功を奏して永和のころには、九州はほぼ武家方になって、南朝勢力は大きく衰退した。しかし、水島陣による少弐誘殺に伴う島津氏の離反によって、九州の完全掌握には至らなかった。

鳥栖市域は、筑後川渡河地点に接し、また近接していた。軍事要衝として、合戦に際し

図2-4　宛行地位置図（約１/4.5万・国土地理院）

18 「深堀文書」『南北朝遺文・九州編』２７１２

19 「後藤文書」『南北朝遺文・九州編』２８５４

20 「山代文書」『南北朝遺文・九州編』３２９５

21 「伊東文書」『南北朝遺文・九州編』３４２７

22 「大鳥居文書」『南北朝遺文・九州編』２７７３、「天満宮文書」『遺文』２７９５

ては、陣が布かれることもあった。応安４年（１３７１）末に今川了俊は九州に上陸、次第に勢力を拡張し、大宰府を掌握する。しかし８月になって、大内介入道（政世）が帰国したため、危機に陥り、宮方が勝利を得た。

そうしたなかで劣勢となりつつも、今川了俊は城山御陣（基山）を拠点として、宮方の北上に備えた。応安６年２月24日に宮方の菊池武政・武安は筑後川大豆津瀬（三根郡、今のみやき町豆津）を渡って肥前本折城（吉野ヶ里町神埼本告牟田）を攻めた[23]。対抗して了俊軍は、本折城を包囲する宮方の後方をつくべく、宮浦、由比、雲上に陣を敷き、今川頼泰は高上を発向して、綾部に陣を敷いた[24]。宮浦は現基山町、由比は市内の柚比（現弥生が丘）であり、雲上は市内平田町の雲野尾峠に相当しよう。

つづいて４月８日には、所隈御陣とあり、高上を出発した弾正少弼殿（今川氏兼、了俊弟）が大将となってこの山に陣を敷いた。所熊という山は市内村田（西新町）にあり、二軒茶屋後方の山をいう。標高１１３ｍで、明治期以来の陸地測量部地図に所熊の山名が記されているが、いまは北西に鳥栖西部工業団地があり、北東には九州龍谷短期大学、南にも削平地があって、そうした部分は旧状を失っている。

神崎郡に展開した渡河後の宮方後方を攻め、補給・連絡路を断つ布陣であろう。本折城の後攻とされてい

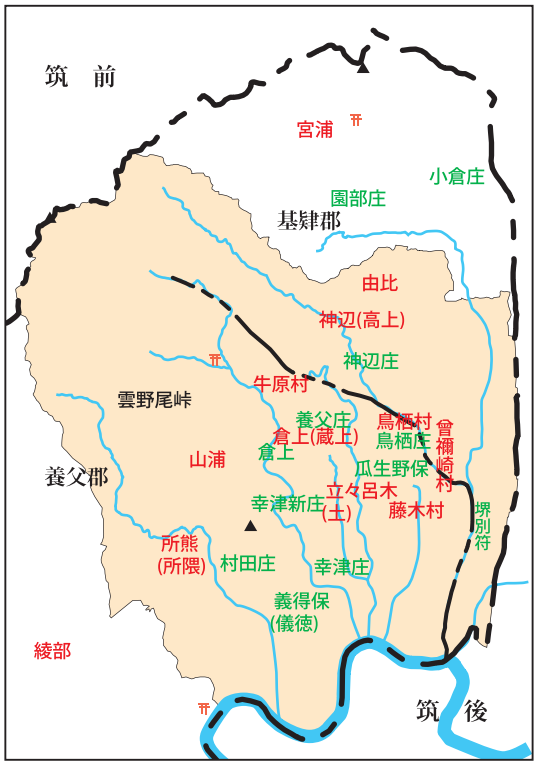

図2-5　鳥栖周辺布陣位置図

23　「入江文書」応安８年２月「日田原氏能軍忠状」『南北朝遺文・九州編』５１７１

24　以下前後の動きは、『大日本史料』６編37、４頁や応安七年七月「毛利元春軍忠状案」「毛利家文書」（永和二年）三月十一日「今川了俊書状」「同」応安八年八月。「日長井貞広軍忠状写」『萩藩閥閲録』『遺文』５１１２、５２７７、５２３１による。

なお大将は氏兼とするものと、右衛門佐殿つまり今川頼泰（了俊弟、仲秋、了俊養子）とするものがある。（前掲『遺文』５１７１）

25　『大日本史料』『福岡県の地名』『遺文』の注記は筑前国怡土郡高上村とするが誤りである。

る綾部城と連携する攻撃ラインでもあった。高上は神辺[25]で、ここを確保した上で西海道を西に行軍した。

所隈の陣の取得・確保はなかなかに苦戦であったらしい。毛利元春は

四月八日所隈御陣為御二大事一之由、蒙レ仰之間、弾正少弼殿（今川氏兼）御共仕、馳二上　彼山一取レ陣畢

と「馳せ上った」と表現した。大友一族・田原氏能もまた苦戦の様を強調する[26]。

（本折城）為二後攻一、自二高上御陣一、右衛門佐殿御発二向綾部村一之時、雖レ被二仰下一、諸軍勢等悉依レ令二辞退一、任下被二仰出一之旨上、致二金吾御共一、其後於二野老隈御陣一、抽二忠節一之刻、彼城既依レ及二難儀一、為二兵粮助成一、御手人々并惣領大友手輩相共、差二遣親類若党一等、廻二種々計略一、致二粮米以下合力一、励レ至レ忠訖

（大意）敵方に包囲された本折城の後攻（救援）として、高上（神辺）の御陣より綾部にむけて今川頼泰殿[27]が出発された。そこで随軍するよう命じられた。他の軍勢はうろたえて辞退するばかりだった。しかし自分たちこそは頼泰殿に従い、野老隈[28]（ところくま、つまり所隈・ところくま）の御陣にて、忠節を励んだ。本折城が難儀をしていた時分に、兵粮米の補給に尽力し、今川の御手の者と、大友惣領またその手の者といっしょになって、親類若党が協力して、忠を励んできた。

こうした諸将の陣所、所隈ほかでの尽力に、今川了俊も満足していた。そのことは、毛利元春に宛てた、彼の書状[29]のなかの次の文言でわかる。

所隈陣取事、愚意通申候処ニ、御張行候、成功候了

一連の合戦では筑後の福童、八丁島にも陣を構築した[30]。敵方の包囲網も広範であった。

このように市内の陣所とされた場所、つまり由比（柚比）、雲上（平田）、所熊（村田）は西海道に面した交通の要衝であった。

今川了俊はこれより先、応安５年城山を本陣とした今川頼泰は日隈御陣を前線基地とし、田原氏能らは前年から死守している。この日隈は山上に日隈権現があった朝日山を指

26　前掲『南北朝遺文・九州編』５１７１

27　右衛門佐殿、中国風にいえば金吾で、金吾も同じ人物

28　野老は「ところ」であるから、「ところくま」である。

29　年欠（永和二年（１３７６）三月十一日「今川了俊書状」『南北朝遺文・九州編』５２７７

30　前掲『南北朝遺文・九州編』５２８３

図2-6　所熊城写真（奥３峰、左手前の山は朝日山 - 当時は日隈山）

す。現在も小字に日隈が残っているし、ジョウノコシ（城の越）という地名もある。のち、文明10年（1478）に渋川氏は日隈山に陣取って大内氏が城山を攻撃し、対する少弐氏は神辺を陣とした[31]。各拠点での攻防は度々くり返された。幕府によって、応永２年（1395）８月召還される。しかしそれまで彼は九州の幕府勢力の強化に努めたし、かなりの程度それは成功し実現できた。

この時代における市内域にあった荘園の動向はこうした政治勢力の動きにも連動する部分があった。以下、わかる範囲で見ておこう。

2　市域内の荘園の動向

大隅守護領倉上庄

図2-7　蔵上町航空写真（平成18年）

先述したように、「貞治弐年（1363）卯月十日」島津道鑑譲状[32]によれば、大隅守護領、すなわち守護職にともなう所領として、肥前国倉上庄（蔵上）があった。守護領が他国[33]にあったことになるが、同様、他国に設定された大隅守護領は、ほかにも薩摩国指宿郡、筑前国今津村があった。これらは交通の要衝である。道鑑は子の師久にこの所領を譲ったが、また同じ日に同時に薩摩守護職も師久に譲っており、そのなかにやはり他国の所領が見える。筑前国今田村もそのなかにあって、「薩摩役所」と注記されている。今津の石築地（元寇防塁）は大隅国の負担であったことがわかっている。おそらく今津が大隅守護領になったのはそうした経緯があってのこと

31　「正任記」文明十年十一月九日、「渋川教直書状案」『山口県史』

32　「島津家文書」『南北朝遺文・九州編』4466、4470。なお島津氏所領注文『薩藩旧記』『遺文』4470にも同じ記事がある。

33　守護管国ではない国。

であろう。薩摩守護領の今田は蓆田郡平尾であるといい、そこにはイマダノマエという地名もある[34]。ここでの薩摩役がどのような内容であったのかわからないものの、異国警固役に関連することも考えられる。してみれば大隅守護領・倉上庄にも同様に大隅守護にとって、役所（負担役所）に類する重要な意味があった。肥前における異国警固は玄界灘のみならず、東シナ海、大村湾、有明海沿岸と広域で行われたはずで、その責任者は第一には肥前守護（鎮西探題兼補）であっただろう。石築地役がそうだったように、ほかにも各国守護に負担させる部分も多かっただろう。そうした役所ないしは役所々領が倉上にあったのかもしれない。

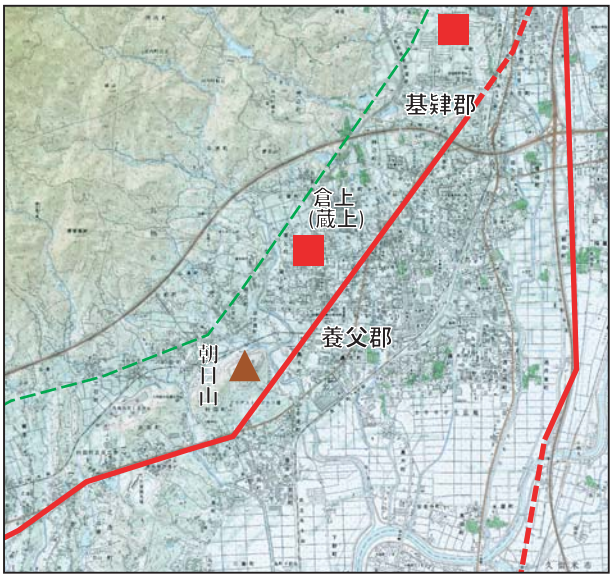

図2-8　西海道と蔵上（養父郡家推定地）

倉上は西海道に近く、要害地でもあって、陣が設けられたこともあった。貞和４年（１３４８）10月以前に、北軍の部将が筑後方面の作戦を開始し、荒木弥六家有は倉上ほか各地の御座所に同行し、宿直している[35]。

年欠２月17日の斉藤明真書状にも倉上がみえ[36]、

島津殿御領□□（肥）前国倉上事、被成御教書候、

とある。斉藤明真は今川了俊の奏者（取次）と推定されるので[37]、今川了俊が島津氏の大隅国守護領として、倉上知行を安堵したことがわかる。

いっぽう同じ文中で、

34 『福岡県の地名』日本歴史地名大系41　平凡社２００４

35 「荒木家有軍忠状」・「近藤文書」『南北朝遺文・九州編』２５９７

36 『南北朝遺文・九州編』６３５３

37 『南北朝遺文・九州編』５６８１、６３４２ほか

松浦山代方へ、別して御書、被遣候

とあるから、松浦党も倉上に関するなんらかの権利を、今川了俊に対して主張していたらしい。混乱期であったが、島津氏の倉上知行が継続された。

天満宮領神辺庄・飯田村・鳥栖庄・曽根崎庄

神辺庄は、永和４年（１３７８）10月７日信曇申状[38]に

望申　五禅師職在給田神辺庄

とあり、五禅師の給分であった。

飯田村は、貞和７年（１３５１）正月日の安養院雑掌申状[39]に

肥前国飯田村田畠八町

とあって、太宰府安養院が飯田村の知行を主張している。

永徳２年（１３８２）４月25日・今川仲秋施行状[40]には

天満宮領肥前国鳥栖図司政所職并中薗屋敷

とあり、鳥栖庄における天満宮領の所職の内容がわかる。中薗は鳥栖周辺というよりは天満宮近くを示すのであろう。なお図司政所職の部分は「留司（留守）政所職」と読む人もいる[41]。

至徳２年（１３８５）12月13日今川仲秋書状・河上神社文書[42]に「曾禰崎庄事」がみえており、社家の代官を召して、社家の申し分を注進せよとある。

このように今川了俊も太宰府・安楽寺の権益は保護しようとしていた。

村田庄（コラム76頁を参照）

38　「太宰府天満宮史料」『南北朝遺文・九州編』５５０１

39　「太宰府天満宮史料」『南北朝遺文・九州編』２９８８

40　「太宰府天満宮文書」『南北朝遺文・九州編』５７１８

41　『南北朝遺文・九州編』、写真は川添昭二『今川了俊』93頁にある。

42　『南北朝遺文・九州編』５９４５

コラム　村田氏について

鳥栖市村田町は、中世に宇佐八幡宮領の村田庄の故地である。荘園の成立は、応徳２～保安４年（１０８５～１１２３）と考えられているが、史料上の初見は、正応５年（１２９２）の「惣田数注文」（河上神社文書）である。ここに庄園分として「村田庄　百二十七丁」とあるものである。また「宇佐大鏡」には、「村田別府」とあり、田数１３０丁、加地子米30石で半分が不輸租（税の半分が免除）であって、宇佐大宮司公順の私領とある。両者は同一のものと考えられている。

この荘園の地頭職は、貞和６年（１３５０）の足利直冬下文（後藤家文書）によると、後藤兵庫允光明に宛がわれている。後藤氏は杵島郡塚崎荘（現武雄市）を本拠地とする在地領主であるが、本文書中に「由緒之地」とあることから、後藤氏は旧来から当庄の地頭職を所持していたと考えられる。その後観応３年（１３５２）には、日向国の伊東祐武に当庄地頭職が宛がわれている（日向記）ことが知られるが、その後の村田庄地頭職についての記録は、残存していない。

一方、村田を苗字の地とし、９通の文書「村田文書」（新熊本市史　史料編２）を残す、村田氏の存在を知ることができる。年号がわかる最も古い文書は、応永８年（１４０１）５月26日付けの村田入道に宛てた千葉胤興安堵状写である。これには「肥前国養父郡村田内十二町事、任二相伝之旨一、知行不レ可レ有二相違一之状、如レ件」とあり、村田氏が先祖相伝の地として村田の地内12町の知行を安堵されている。同様の安堵状は、永正４年（１５０７）８月１日付けで和是（九州探題カ）から村田治部丞にも充てられている。さらに天文７年（１５３８）11月22日には、九州探題渋川貞基（義基）から秀員へ「村田因幡守一跡之儀連続之事」として、その知行を安堵されている。

年欠文書だが、森繁宣（九州探題渋川尹繁の被官カ）書状写は「基肄郡衆　養父郡衆」に宛てて、「敵城の柑子岳が唯今酉刻に落城したので、すぐに各人はその境に出陣するようにせよ。その時には故参当参（被官化の新旧）を問わず、すぐさま馳参じ、油断ないようにせよ。もし無沙汰の者がいたならば、軍忠があっても聞き入れないとの仰出であった。」とある。現在の福岡市西区今浜にある柑子岳城は、この時期大友軍と大内軍の攻防の場になっていた。探題方は大内軍の一翼として活動しており、基肄郡衆と養父郡衆は、与力を求められていたのである。この文書が村田家に残っていることから、村田氏はこの時期九州探題渋川尹繁を支える養父郡衆の中心的存在であったと、考えられる。

この「村田文書」には、和是から村田総三郎宛の文書が３通ある。永正４年７月28日の和是吹挙状写によると、総三郎は和是を通じて京都（室町幕府）に官途名の治部丞を所望して、許されている。彼はその後、村田12町の本地安堵をうけた（和是知行安堵状写）。さらにそれ以前には、年未詳３月16日付けで村田村居屋敷分六町を安堵されている（和是書状写）。これらは、村田氏と九州探題との結びつきの強さを示している。

前述の和是書状写では、三根郡が静謐（戦乱が鎮まった）になったので、まずは村田村居屋敷分六町の知行を認めるとあり、九州探題領が安堵されたときには、村田村一村を安堵するとある。当時、村田氏が村田村（村田庄と同一カ）全域を知行してはいなかったことがわかるのだが、同時に九州探題自身も探題領の支配が不確実なものであったことを語っている。